我が家の子育て

甘楽町　　飯塚　浅江

家族構成	父親	４６歳	会社員
	母親	４６歳	パート
	長男	２３歳	公務員　（別居）
	次男	２１歳	大学３年生
	三男	１４歳	中学２年生

長男誕生と共に私たちは、親としての「はじめの一歩」を踏み出しました。「子育て」とは、何時までの事を指すのでしょうか？学校を卒業するまで、二十歳まで、人によって考えは違うと思います。しかし、何時になっても子供は子供、親は親、その関係に変わりはありません。何時までも、親は子供を心配します。我が家では、二人の息子が成人し、二人についてはもう子育ては終わったと思っています。あとは、三男一人となりました。年々、子育ては難しくなっているような気がします。子供の性格，健康状態、家庭環境，人間関係、社会状況いろいろな事が関わってきます。最近の子供たちは、防犯ベルを持ち、学校へ通うような社会になってしまいました。世の中は、危険な事がたくさんあふれています。情報化が進み、どの家庭でもパソコンの一台くらいあります。家に居ながらにして、犯罪に巻き込まれる事も珍しくはありません。携帯電話やパソコンは、子供任せにする事無く、常に親が、目を光らせていなければなりません。どんな道具も、子供一人に任せるのではなく、子供と道具の間に必ず、大人の誰かが入るようにしたいものです。我が家では、長男，次男はパソコンも携帯電話も持っていますが、中学生の三男には、携帯電話を持たせていません。パソコンは、親の管理下で使わせています。子供を駄目にするには、「何不自由無く、お金と、物を与え続ければ良い。」と、聞いた事があります。豊かな時代に生まれて、物を制限するという事は、難しくなってきています。しかし、あえて少し足りないくらいの暮らし方が、良いのではないかと思っています。

私たちは、いろんな方から、知恵をいただきながら、良い事は真似をして子育てに当たってきました。不器用な私ですので、「体当たり」と言った表現が、合っているかと思います。その点、主人は、常に冷静な人なので、的確なアドバイスをしてくれます。去年、息子たちをたいへん可愛がってくれていた姑が、亡くなりました。主人の母にも、本当にいろいろな事を教えていただきました。最後には、「前向きにしっかりと生きる」という事を私たちに、身をもって教えてくれました。母は、ベッドの上で家族に見守られ、最後に一筋の涙を流すと、そっと目を閉じ、静かに黄泉の世界へと旅立ちました。私たちはこういった悲しい出来事も、子供たちにとっては、大切な教育の場だと思っています。老いは、必ず誰にでもやってくることを教え，子供たちと共に家庭で介護をし、家族に協力をしてもらいました。子育ては、ただ単に子供を育てる事だけではなく、我慢をさせたり、時には、喜ばせたり、怒ったり、哀しんだり、楽しんだり「喜怒哀楽」があるものです。

私たち夫婦は、始めのうちは、互いに暴走する事もありました。しかし、今では、とことん話し合い、なるべく考えを一つにまとめるよう努めています。父から、聞いた事があります。「夫婦背中合わせでは、子供は育てられない。」と言う事を。私たちは、家庭という土台をしっかり築き、アメとムチを使い分け、愛のエッセンスを振りかけながら、一つ一つ乗り越えてきました。子育ては料理と同じだと思

っています。料理は、素材を生かし手間ひまかけて、味見を何度もして、美味しいものが出来上がります。しかし、実際は、甘すぎたり、しょっぱ過ぎたり失敗もあります。それが家庭料理であり、家庭の味は、個性的です。そんな我が家の三つの温かい子育てメニューを紹介します。

叱ってばかりでごめんね（長男編）

子供というものは、なかなか親の言うことを聞いてはくれないものです。
「なんで、お母さんのことわかってくれないの？」
「なんで、言うこと聞いてくれないの？」
子育ての仕方が、わからない私は、「なんで・・・」が、口癖になっていました。
長男、次男がまだ幼稚園に入っていなかった頃だと思います。
自我の強い長男をよく叱っていました。自分の手が痛くなるほど、長男のお尻を叩いたこともあります。次男は、そんな様子を良く見ていましたから、とても、聞き分けの良い子でした。私は悩んでいました。息子の寝顔を見ては、「なんてかわいい子なんだろう。昼間は、あんなに叱ってごめんね。」いつも、この子たちの寝顔を見ては謝っていました。そんな頃、ラジオから流れてきた教育相談での回答者、「平井信義」さんのやさしい声に惹かれました。教育相談では、私と同じような悩みを持っているお母さんが、たくさんいることを知りました。平井先生は、「叱らないしつけ」をすすめていました。「自立」と「スキンシップ」の大切さを教えてくれました。私はミシンを踏みながらラジオを聞いていたので、教育相談になると、いったん手を止め、いろんなケースをわが子に当てはめていました。平井先生の、「ほんの少しのやさしさを」「心にのこるお母さん」この二冊の本を手に入れることができました。この本は、項目別に書いてあるので、今の自分に当てはまる項目を見つけては、何度も、何度も読み返します。そうやって、私は、自分自身を変えていきました。私なりに、やさしく、スキンンップの上手なお母さんへと変わっていきました。私と同じように、子供とどう接したら良いのか分からない方がいたら、どうぞ、勇気を出して、誰かに相談するか、図書館か、本屋さんへ行ってほしいと思います。

長男の子育ては、すべてが初めてです。暗闇を歩くようなものです。知らず知らずのうちに、明かりを照らし、道を作り、先回りをしていました。長男が、大学入学と同時に、「このままではいけない。」と思いました。学校まで、家から通える距離でしたが、これは良い機会だと思い、話し含いの結果、大学の寮へ入れる事にしました。始めのうちは、心配で仕方ありませんでしたが、慣れて来ると、これが不思議と平気になるものです。息子も、寮生活に慣れ、良い友達もたくさん出来ました。どんな生活をしているのか、学校へ行っているのか。家にいる私たちには、全然わかりません。時々我が家では、友達を連れて泊まりに来るよう勧めました。私たちは、畑から野菜をたくさん取ってきて、愛情たっぷりの田舎料理で、もてなします。普段食べられない野菜のてんぷら、おひたし、焼き魚、炭をおこし、七輪でバーベキュー。そして、息子の様子を聞いたり、しっかり勉強しているか確認したり、友達のふるさとの話を聞いたり、多いにその晩は盛り上がります。友達を見れば、息子の暮らしぶりは大体想像できます。一宿一飯の恩義は、三男と遊ぶ事。

私は、「親が、子育てをするのは、ほんの一部分、外に出て、いろいろな事を経験させていただき、いろんな所で勉強させて頂いているのだな。」と、長男の成長を見てつくづくそう感じました。長男も、今は、社会人一年生。初めてばかりの職場で、皆さんのお世話になっている事でしょう。

反抗期なんてこわくない（次男編）

今まで、とても良い子だった次男の反抗期は、中学三年生の時でした。志望校をしぼり、先生と、生徒と、親との三者面談が行われる頃でした。家庭でまず、志望校を決めるための話し合いを持たなければならないのに、口を閉じたまま、話し合いになりませんでした。勉強も、部活も何でも、一生懸命やる子でした。夏休みに、イタリアへ甘楽町の国際交流の研修団員として、約二週間出かけていました。この研修は、町から三分の一の旅費を負担していただいて、国際感覚を身につけ、交流を深めて来るというものです。そこでは、普段体験できない本当にすばらしい経験を、たくさんさせて頂いてきました。次男は第七次、三男は、今年の夏、運良くこの研修に参加することが出来ました。しかし、次男は、帰ってきてから、勉強に集中できなかったのでしょうか。勉強に対して自信をなくしてしまい、志望校を下げると言い出したのです。私は、この子の性格をよく知っていましたから納得しませんでした。「二つの道があれば厳しい道を選んだ方が良い。」と薦めました。私が強く出れば出るほど、次男は口を開きませんでした。私も一歩も譲りませんでした。主人は次男に助け舟を出していました。次男を誰よりも、暖かく見守っていたのは、主人だったかもしれません。三者面談の当日、私は、はっきりと息子にも先生にも私の考えを伝えました。先生は、冷静に息子と話してくれました。そして、ある考えを息子に提案しました。「すべり止めを受けてみて特待に受かれば、まず大丈夫だろう。」ということになり、ようやく、息子も先生の考えを受け入れ、その結果、何とか志望校へと進むことが出来ました。次男は、「口を閉ざす」という事で反抗したのでした。

反抗期というものは、成長の段階において、なくてはならないものであって、自立の目印だと思われますが、いざやってくると、大変まごつくものです。ずっと、手のかからなかった良い子が口を閉ざして親に反抗する。何日も、何日もそんな状態が続くと気が滅入るものです。そんな時、先生はとても頼りになりました。息子の気持ち、親の気持ちを良く理解して聞いてくれました。間に入って、いろいろな解決方法を探ってくれました。どうしたら良いか、まったく出口の見えない親子を導いてくれました。とても感謝しています。この時の担任の名前は、今でも私と息子の会話に時々登場します。「反抗期とは、こんなものだ。」という勉強を親のほうでも、少ししておくと慌てずにすむと思われます。反抗が、始まる前に、しておかなければならないことがもう一つあります。それは、子供とたくさん遊んでおくという事です。我が家では、三人とも少年野球をやっていました。父親は、外に照明をつけて毎晩、キヤッチボールやノックの相手をしました。父親が本気になれば息子たちも本気になります。上毛カルタの時期になると、毎晩、カルタの練習が始まり、兄弟、親子で対戦しました。次男は運良く、県大会入賞を果たしました。毎晩、勉強の後は、将棋、トランプ，花札、ウノなどで遊び、子供たちと信頼関係を作りながら、私たち自身が、いろんな事を楽しみました。

今、次男は、大学生活を意欲的に送っています。勉強も、遊びも、バイトも本気です。時には、私の相談にのって、アドバイスをしてくれる事もあります。とても、頼もしい存在です。次男を見ていると「若い」っていいな。と、つくづく感じます。前向きで、お友達もたくさんいて、何よりも、毎日を楽しんでいる感じがします。もうすでに、就職活動も始まっているようです。

いろんな方の力を借りて（三男編、その１）

三男は、あまり活発の子ではありませんでした。生まれてすぐ、心臓の弁に逆流があるといわれました。でも、普通の生活は出来ました。知らず知らずのうちに過保護にしてしまったのでしょうか？小学校入学と同時に学校へ行けなくなりました。カーテンの影に隠れてしまうわが子を、無埋やり車へ乗せて引っ張っていきました。担任の先生は「今日のところは、家でゆっくり休ませてあげてください。」といいました。翌日主人は、「車で送ってはだめ、歩いて連れて行け。」といいました。私は世間体を気にしていましたから、歩いて、わが子を学校へ送って行くのには、抵抗がありました。しかし、主人の言うとおり、「こういう事は、隠さず、周りの人にも、応援してもらったほうがいいのかもしれない。」と思い直しました。それから、三男と私は、歩いて、近所の人に花壇の花をいただきながら、学校へ通いました。教室の片隅には、畳が二畳ほど敷かれていて座卓が用意されていました。担任の先生は、「ここで、疲れたら横になってもいいし、どんな格好をしていてもいいですよ。」と言われました。正直、私は、そんな息子を見るのが情けなかったです。朝礼に出るのも嫌、掃除も嫌、プールへ入るのも嫌、もちろん学校も嫌、なんでも嫌の息子でしたが、自然の中が大好きでした。ある時、近くのこん平山へ探検に行くことになりました。先生は、そんな時、息子を「山の先生」に仕立てて、先頭に立たせました。そんな先生の心遣いがとても有り難かったです。

夏休みを迎える頃には、やっと、集団登校できるようになりました。みんなと違っている子でしたので、それからも何度かいじめられることもあったようです。おなかが痛い、頭が痛い。と訴えることも度々ありました。息子にとって、保健室は、一番居心地の良い場所だったようです。小学校時代は、六年間ほとんど毎日、保健室に顔を出していたそうです。先生方、地域の方、いろいろな方々の手助けをいただき、何とか学校生活を送る事が出来ました。

小学校四年生の時、お友達に誘われて、少年野球に入りました。野球は、あまり好きではありませんでした。「ボール拾いに行く。」と言っては、近くの川で遊んでいた事も度々ありました。野球の仲間も、影響を受けて、一緒によく山や川へ出かけていきました。野球に入る事によって、たくさんの友達が出来ました。小学校最後の夏休みも、毎日、大好きな川で遊びました。何人かの家の遠い子は、我が家へおにぎり持参で来ていました。午前十時ごろから川で遊び、みんなでお昼を食べ、午後一時からプールに入り、四時から七時頃まで野球へ行き、本当に充実した夏休みを過ごしました。川遊びは、危険もあるので、「濡らしても、汚してもいいけど、ケガだけはしないでね。」と、出かける度に皆に必ず声かけをしました。三男には、大好きな自然の中で、友達と思う存分遊ばせました。

プール嫌いだった息子も、富岡市民プールで行われた、その夏の郡の記録会では、見事、百メートルをクロールで泳ぎきりました。そんな夏休みも終わる頃、宿題で「ぼくの好きなこと、やりたいこと」という題で作文を書きました。自然とのふれあいを書いたその作文が、県で金賞に入賞したのでした。さらに中央コンクールへと進み、そこでも一都九県で最優秀賞を頂くことが出来ました。表彰式には、三男と担任の先生と両親で、東京の新宿、全労済ホール「スペースゼロ」へと招かれました。夢のような一日を過ごす事が出来ました。この事は私たちにとって、三男からの最高のプレゼントでした。

宝物（三男編、その２）

小学校へ入学した頃から、ずっと、三男は、石にこだわりを持っていました。ポケツトの中にはいつも、かわいい小石が入っていました。私も、「この石は三男の宝物」そう思い、一つでも捨てるような事はできませんでした。調子に乗ってどんどん拾ってきました。家の中も外も石でいっぱいになりました。特に、綺麗な石は、箱に綿を敷いて入れさせました。不思議な事に、先生やお友達やお友達のおじいちゃんや親戚の叔父さんからも石のお土産を頂きました。小学校を卒業する時、息子は、近くの山で掘ってきたロウ石を丁寧に磨いて、穴をあけ、きれいな紐を通し「石のネックレス」をつくりました。それを大好きなM先生にあげました。M先生はとても喜んでくださいました。M先生は、「このネックレスをすると、とても元気になるんですよ。私の宝物です。」と言って下さり、マフラーの下から、そっと見せてくれた事がありました。この先生も、三男のことを暖かく、気長に、見守ってくれていた先生の一人です。そして、最近では中学の選択美術で勾玉を作り、文化祭に出品しました。その作品を見て私は、感心してしまいました。とても丁寧に磨かれ、私自身、欲しくなるような作品に仕上がりました。

この子を何とかして自立へと導くために、私たちは、見守り続けています。誰よりも、ゆっくり、ゆっくり歩く、マイペースの三男、ゆっくりだからこそ、見えてくる物もあるのかもしれません。他の子との比較は止め、「この子の良さをじっくり、見つめて行きたい。」と考えています。先日、「勉強の方も、少しずつ努力して一歩一歩進んでいこうね。」と私が声をかけたら、三男は、「僕の場合は遅いよ。匍匐（ほふく）前進で進んで行くからね。」と言いました。私も負けずに「その進み方なら倒れる心配無いね。しっかり地に着いて進んで行こう。」と励ましました。これからも、きっと、迷いながらの子育てでしょう。でも、いろんな方の力を借りながら、楽しく子育てをしていきたいと思っています。なぜなら、私たちは子育てを楽しむためにこの子を産んだのですから。

みなさん、子育てを面白がりましょう

我が家の子育てメニューいかがだったでしょうか？お金をかけず、粗末な家庭料理ですが、私たちは、何時も、真剣に、心を込めて、時にはレシピを見ながら子育てに挑戦してきました。子供を育てる上で、家庭の役割は、とても大切だと思っています。料理で言えば「下ごしらえ」とでも言いましょうか。それから、学校や地域の力が生かせるものと思います。私たちは、子育てによって、いろいろな事を学び、いろいろな事を経験し、夫婦の絆をも、深めて来られたのかもしれません。子供がいたからこそ出来た経験は、本当にたくさんあります。「素材の持ち味を生かし、魅力を最大限に引き出す。」そんな子育てをこれからもしていきたいと思います。最後に、私が子育てに不安になった時に、自分自身を励ますための二つの言葉を書きます。

＊ものを教える際にも、子供を味わい、子供を楽しむ姿勢を忘れないで、大きく広く見てやってください。（東洋先生の「子供にものを教えること」と言う本の中から）

＊教える事を面白がる。僕は、教育者だと一度も思った事は無い。だけど、自分のやっている事は、面白いとずっとやってきた。自分が面白いと思っている事を一緒にやる。それが一番でしょ。（小柴昌俊先生の言葉、上毛新聞の記事より）